

中央大学創立125周年記念展示

豊田雅幸

二〇一〇年一月二〇日、中央大学の多摩キャンパスで開催中の創立一二五周年記念展示にお邪魔をした。ご多忙にもかかわらず、展示の企画を担当された大学史編纂課の中川壽之さんには、貴重な解説とともに案内をしていただいた。

中央大学の今回の展示は、「学びのたから 中央大学の起源・絆・記憶」と題するもので、「第一部 中央大学の起源」「第二部 赤い襷の絆」「第三部 キャンパスの記憶―インタラクティブアート」「光と記憶のジオラマ」という三つのパートから構成されている。比較的独立性の高いテーマを盛り込んだ、意欲的な企画との印象を持ったが、創立百周年の際に通史的な展示を実施した関係から、このようなアプローチになったとのことであった。以下、各パートの特徴について紹介しよう。

「第一部 中央大学の起源」では、一八八五（明治一八）年の「英吉利法律学校」創設に始まる、同大の草創期に焦点が当てられている。一八人の若き法律家たちによって創設されたというユニークな歴史が全面に押し

出された展示で、三パート中で最も資料数も多く、本展示における中核をなしている。なかでも、創設者一八人のグラフィック・バナーと二四九冊におよぶ講義録が展開されている様は、圧巻である。

企画にあたっては、「人物」と「国際性」という点を重視したということであるが、「人物」については、創設者以外にも、法曹界やジャーナリストとして活躍した学員（校友）や、大学の財政難の際に私財を充てたことから、「中央大学の恩人」と称される佐藤正之といった人びとが採り上げられている。

また、「国際性」という観点からは、創設者たちの海外留学にかかわる資料に加え、先の佐藤正之に宛てられた留学生からの絵葉書なども、画面が見える形で大量に展示されており、時代の雰囲気を感じ取れるつくりとなっている。

「第二部 赤い襷の絆」は、「オール中央の心」をひとつにする「絆」の象徴としての、箱根駅伝の展示である。二〇分程度の記録映画の放映を軸に、優勝にまつわる物品などが陳列され、初参加の第二回大会（一九二一年）以降の栄光の軌跡が描かれている。

こうした企画が可能なのも、八四回の最多出場、連続八一回出場、総合優勝一四回、大会六連覇（展示開催時点）といった同大陸上競技部が積み上げてきた実績と、

それを支えてきた大学関係者の「絆」があつてのことと言えよう。一九六八年を最後に、大学チームとしての出場が途絶えてしまった立教にとっては、うらやましい限りである。

「第三部 キャンパスの記憶―インタラクティブアート『光と記憶のジオラマ』」は、インタラクティブアートのテスト・松尾高弘氏の制作・演出によるもので、駿河台・後樂園・多摩の三つのキャンパス景観が、模型とスクリーンの連動によつて展開される。

言葉で説明するのはなかなか厄介なのだが、透明なケースに収められた各模型の上にポインターを置くと、それが置かれた校舎等の写真が、「歴史の直進性」というコンセプトに基づいて、前方に設置された大型スクリーンへ次々に映し出されるという仕組みになっている。説明的な部分は一切ないため、それぞれ一〇〇〜二〇〇点ほど用意された写真映像から、各キャンパスの持つ「記憶」を体感し、その空間を楽しむという、まさにアートになっている。

こうした「アート」を「大学史展示」に融合させる試みは、今回で四回目ということであるが、これまで参観した他大学の展示には見られない斬新な手法でもあり、かなりの異彩を放つものと言える。

このように、各パートとも非常に充実しており、全体

としてもかなり力のこもった展示に仕上がっている。しかしながら、今回の展示は、わずか八日間という短い期間の開催であり、その点が惜しまれてならない。

周年行事の一環ということもあるが、中央大学には大学史に関する常設展示場がないという、立教と同様の課題を抱えていることが影響しているようである。そのため、今回の展示場は、式典との関係でキャンパスのわりと奥まったところにある大ホールが利用されており、正直、あまりアクセスのよい場所ではなかった。来場者の誘導といった点にも苦勞が偲ばれるところである。

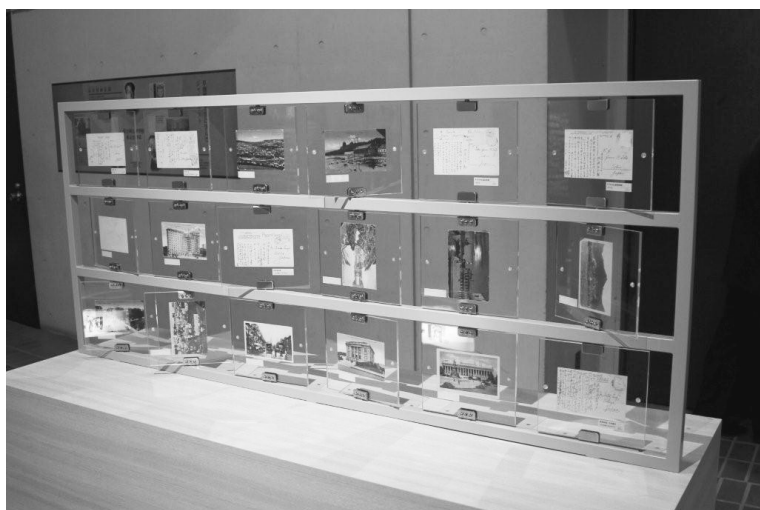
なお、展示場への入場の際には、大学史編纂課のもう一つの企画として編集・出版された、『タイムトラベル中大125 1865→2010』が無料で配布された。同書は、学会が発行の『学員時報』に一五〇回近くわたつて連載された記事をベースとして編集したもので、「中央大学の歴史にとつて重要なできごと」「興味をもっていただけのような話題」「意外と知られていない事実」「大学関係者の人間味溢れるエピソード」など、盛りだくさんの内容で、分量も三〇〇頁を超えるものである。

こうした書籍の出版や記念展示の実施は、当然のことながら短時間で成しえるものではない。――大学史編纂課の方々のこれまでの取り組みに感嘆するとともに、日々の研究業務の積み重ねの大切さを、改めて考えさせ

られる訪問となった。



展示風景 第1部 中央大学の起源



展示風景 佐藤正之宛ての在外留学生からの絵葉書